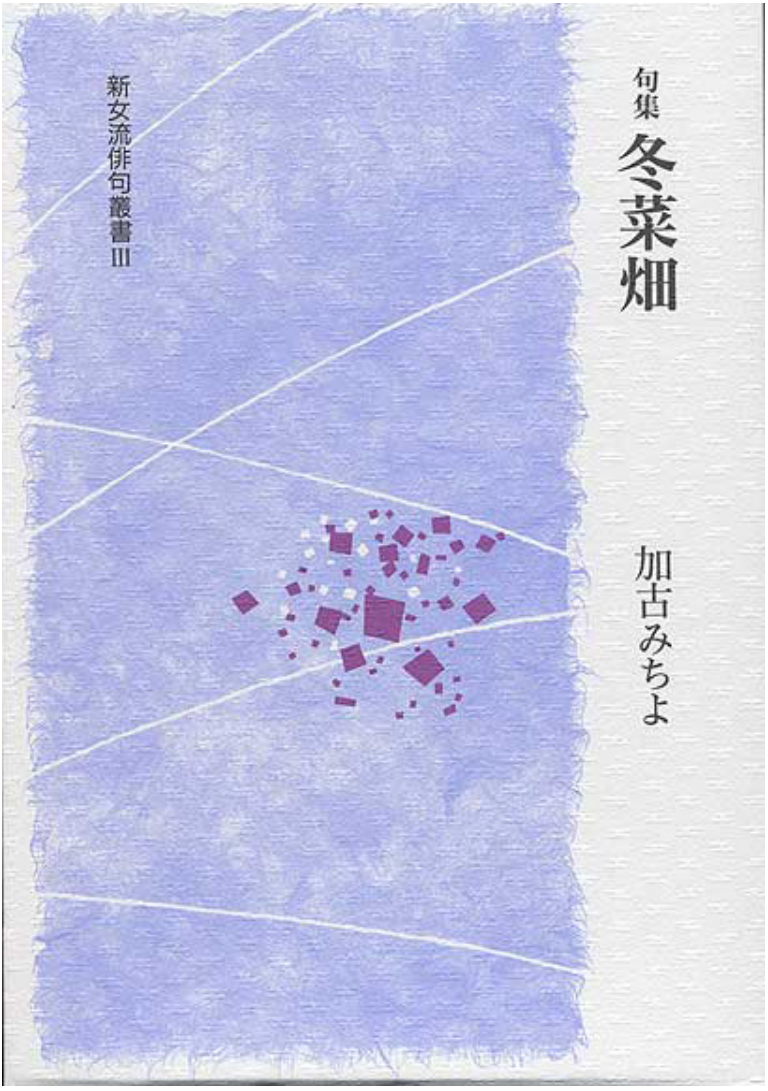

新女流俳句叢書Ⅲ

句集

冬菜畑

加古みちよ

花の両朝より家に居たりけり

夜店の灯尽きて夜店へ歩を戻す

身障の子の影の手や踊りの輪

コスモスに遍路の影の過ぎゆけり

この村に神と歌あり水澄める

菓子買うて戻る雨月の道光り

庭に出れば庭にも仕事冬の鵙

ねむき時眠りてゴールデンウィーク

初鴨の三羽なりける川の幅

雨音のしだいに高し花ユッカ

飛ぶときの思ひおもひの柳絮かな

野分あと玻璃に息づくもののあり

菊人形解かるるときの早さかな

木の集落つ大きな音と思ひけり

山茶花や目白が卵産んでをり

水門は一枚の鉄秋の暮

隣家への灯油一缶初荷とし

球根の配布に並ぶ納税期

坐せばすぐ乱るる机辺亀の鳴く

春宵や夫の買ひ来し袋菓子

たつぷりの菖蒲湯に夫呼びにけり

確実に年詰まりつつ喪に籠る

仏壇と向き合うてゐる初畳

そこいらに夫の声あり寒夕焼

雪積むと仏壇へものいうてをり

亡き夫の箸洗ひをり春の昼

梅に来て両手さびしくなりにけり

我とわが励ます衣更へにけり

しつかりとせよと田の面の蟇

ふとりゐし夫には太さ茄子の馬

野分中ひとりのための風呂焚いて

雪の降る夜の食べること眠ること

戒名の「善女」がかなし桃の花

菜が咲いて西方浄土花ざかり

遺されし茶筅に艶や花の冷

夫の遺品娘の遺品囀れる

蹋むことけふもしてをり冬菜畑

秋の滝秋の音して落ちゐたり

寝ころぶは眠ることなり生身魂

風折れの竹あをあをと十二月

薄氷に大きな靴が来て止まる

ぼうたんの首を支へて牡丹剪る

地蔵会のどの子もよき子かしこまり

船虫や波止に集へるオートバイ

噴水の濡らせし木椅子すぐ乾く

榛の木の巣箱あらはや春の雪

寒椿海鳴り増して来る如し

男ゆく野火の種火の藁提げて

余震なほつづく大地へ種を蒔く

白鷺場にわつと沈みし冬至の日

著者略歴

加古みちよ（かこ・みちよ）

本名　加古美智代

昭和14年　姫路市に生まる

昭和49年　「天守閣」入会。中井汀火師に師事

平成元年　「火星」入会

平成3年　「圭岳賞」受賞

平成4年　「火星」同人

俳人協会会員

現住所　〒670-0042　兵庫県姫路市米田町49番地

句集　冬菜畑（ふゆなばた）　〈新女流俳句叢書Ⅲ〉

2003年1月20日　初版発行

定　価　本体2800円（税別）

著　者　加古みちよ

発行者　本阿弥秀雄

発行所　本阿弥書店（ほんあみ）

東京都千代田区猿楽町2-1-8　三恵ビル　〒101-0064

電話03(3294)7068(代)　振替00100-5-164430

印　刷　モリモト印刷

製　本　松栄堂製本所

©Kako Michiyo 2003

ISBN4-89373-903-4　(1706)

ＰＤＦ製作　俳誌の salon